

ひめゆりの塔

蝉しぐれの中

その慰霊塔は糸満の地にあった
戦争のいたみはおぼろ気にしか知らぬわたしが
最初の壕をのぞき込み思わず息をのんだ
あまりにも想像をこえた形であった

敵機の追撃を受け

ひめゆり学徒隊が身を潜めたというその外科壕は
天然の洞窟を利用したもので

大きな立て壕だった

中はうす暗く所々に草も茂りカビの匂いさえする

傷兵たちのうめき声の中

ずり落ちながら必死に看護する人たちが目に浮かぶ

記念館の中に読みやすい高さで見開いた本があった
戦争末期の追いつめられた兵士や島民たちの
すさまじい脱出の様

敵の砲撃により両足を失った兵士がこう叫んだそうだ

「お願いだから置いてゆかないでくれ！俺は歩けるんだ」

壁にかかったセピア色の写真の中から

おさげ髪の少女たちが無心にほほえみかけてくる

「わたしたちは幸せに生きるためにうまれてきたのです」

あの暑い夏の日の午後

声なき声が館内にこだましていた

さとうきび畑やハイビスカスの花の地で

二十万人にも及ぶ戦死者がでたという

決して風化してはいけない痛恨の思い

わたしたちは幸せに生きるためにうまれてきたのです